

# 『星の王子さま』を読む (2)

——師と弟子と——

芦 田 徹 郎

Reading *Le Petit Prince* (2):

Mentor and Disciple

ASHIDA Tetsuro

**Abstract** : Saint-Exupéry's *Le Petit Prince* is often regarded as a children's story, but it is rather difficult to understand. One of the reasons is that the explanations about the psychology of the characters, the situations surrounding the events, and the causal relationship of the story development are extremely limited. On the other hand, delicate suggestive expressions are used abundantly, and discourses correspond to each other everywhere, helping the reader to understand the story. In this paper, keeping such things in mind, I will try to read the text, focusing on the scene where the little prince who came to the earth meets a fox.

**Key Words** : text, apprivoiser (Fr.), ties, man, friend, initiation

**要旨** : サン＝テグジュペリの『星の王子さま』は、一般に子ども向けの童話と見なされることが多いが、けっこう難解な物語である。その理由の一つに、登場人物の内面心理、出来事の場面状況、それに物語展開の因果関係などについての説明が極度に切り詰められていることがある。反面、細かな暗示的表現が豊富に用いられていると同時に、随所で言説と言説とが呼応しあっていて、物語の理解を助けてくれている。本稿では、そうしたことに留意しながら、地球にやってきた王子さまが一匹のキツネと出会う場面を中心に、テキストの読解を試みる。

**キーワード** : テキスト, 飼いならす, 絆, 人間, 友だち, イニシエーション

## 1. テキストを読む

フランスの作家サン＝テグジュペリの『星の王子さま』(*Le Petit Prince*) は、世界中の言語に翻訳され、日本でも 30 前後の訳書が刊行されていて、1943 年の原著の出版以来膨大な読者を獲得してきた。ところが、私は大学の授業で 10 年ほどにわたって副読本に指定したことがあるが、その経験では、一般に子ども向けの童話とされている割には、何が言いたいかわからなくて、長くもないこの本を読み通すのが苦痛だったと告白する学生が思いのほか多かった。

注 [ ] は芦田による補足。以下同じ。

この物語の理解が難しいことの理由のひとつに、物語展開の大部分が王子さまと他の誰かとの二者間の対話のみによって構成されていて、説明的な叙述がほとんどないことがある。「いつも説明が必要 avoir toujours besoin d'explications」な「おとなのひとたち grandes personnes」(1 章) は、読者として想定されていないのかも知れない。いくつかの場面を除き、行為者の内面心理、出来事の場面状況、それに物語展開の因果関係などについて、直截的な「説明」が極度に切り詰められている。

その反面、大橋正宏がいうように、「感嘆詞・感嘆符〔疑問詞・疑問符〕<sup>注</sup>の使用、しぐさの表現(あ

くび・赤面など顔色の変化・咳払い・凝視・言い淀み・沈黙等)」など、「読者の方に直接届く言語表現」(大橋 2010: 5) が豊富に用いられている。そうした「おや!？」と思わせる些細な暗示的表現こそが、この物語の理解に貴重な手がかりを与えてくれている。

しかも、この物語では、テキスト内の言葉や文章が随所に呼応しあっていて、それが個々の言説と物語全体の理解を助けてくれる。ただし、その呼応関係は、しばしば順接的であるよりも逆接的であって、一見したところ、言説と言説とのあいだに断絶や矛盾があるように思われることが少なくない。物語の大きな部分を占める、王子さまと他の登場人物たちとの対話も、往々にしてかみ合っていない。しかし、他方では、そうした言説間の齟齬にこそ、この物語の「謎」を解く重要な鍵が隠されているように思えるのである。

また、著者自らが描いた挿絵もないがしろにできない。サン・テグジュペリは、挿絵の位置、大きさ、モノクロかカラーかの選択、添える文章等に、最後の最後までこだわったという証言がある (Cerisier 2006: 230)。それらの絵解きをないがしろにすれば、テキストの解釈も不十分にならざるを得ないであろう。その逆もまた同じである。

したがって、書(描)かれていることの呼応関係を軸にして、細部から全体へ、また全体から細部へと、綿密に考察をすすめることがこの物語の理解にとって必要だと思われる。幸いなことに、書物は、ページをさかのぼって読み返すことができるし、何度でも読み直すことができる。この物語は、読むたびに新しい気づきを与えてくれる。

私は、この物語をテキスト(挿絵を含む)に即して読解することを目指している。作品のなかに書(描)されていることに即して、作品を一つの完結した世界として捉えるという視点である。

もちろん、テキストの明示的な言説がすべてを語ってくれるわけではない。文芸評論家の加藤典洋がいうように、「作者は、登場人物あるいは語り手に、あることを『語らせない』ことでも、テキストを編み上げることができる」(加藤 2020: 105) はずである。

『星の王子さま』でも、王子さまも語り手「ぼく」も、語るべくして語らないことで、かえって重要なメッセージを発していると思わせられるところが多々ある。したがって、「書かれていない」ことの読解も重要になる。ただし、それも、「書かれている」ことに根拠を置いて試みたい。

もちろん、いかにテキスト(書かれていること)に

即してといっても、それは、著者の意図の忠実な祖述ではなく、あくまでも私の解釈である。しかし、作品を意味づける権利のいくらかは、作者にだけでなく鑑賞者にもあるはずである。王子さまは、語り手「ぼく」が無造作に描いた木箱の絵の中に一匹のお気に入りのヒツジを認めるが、それは、作者である「ぼく」自身には覚えのない画題である(2章)。しかも、「ぼく」は、そして、おそらく愛読者のほとんどが、「ぼく」よりも王子さまのほうこそが、その絵の「本質的なもの l'essentiel」を見たのだと受け止めている。

他方では、ひとつのテキストを十分に理解するためには、その背景(コンテキスト)を押さえておくことが不可欠だという主張は当然ありうる。というより、研究者や批評家の論評は、それが普通である。

この物語に著者の実生活やそれを取り巻く社会・時代状況が色濃く反映されていることは、多くの解説が紹介するところである。父親の早世があったとはいえ恵まれた幼少期の生活、青少年時代のキャリア形成や恋愛・婚約でのいくつかの不運や挫折、パイロットでもあった自身の砂漠への墜落経験、郵便飛行の職業生活や妻コンスエロとの関係を始めとする私生活上での人間模様、当時の欧米の政治・社会・国際情勢、ドイツとの戦争や自身の軍務体験、占領下の祖国を逃れての渡米と不本意な滞在、そして戦線への復帰とついに帰投することのなかった偵察飛行。そうした伝記的事実と重ね合わせれば、この物語のパースペクティブはずっと広くなりそうである。

ヨーロッパの神話・伝説・民間伝承や、キリスト教をはじめとする文化的・宗教的伝統を踏まえれば、物語に登場する星、バラ、ヘビ、キツネ、リンゴの木、ヒツジなどが織りなす象徴的意味世界の理解も深まるであろう。「剽窃の作品」との指摘さえあるという(藤田 2017: 146-147, 163-169) からは、文学史的な知識のあるなしで作品評価の重みも違ってくるであろう。さらに、心理・精神分析学的な知見に照らせば、王子さまや語り手「ぼく」について、より陰影に富んだ人物像が得られるかも知れない。

しかし、そうした作品外部の諸事情(コンテキスト)は、作品解釈の参考にはするが、主たる根拠にはしない。『星の王子さま』に先立って、あるいは並行して書かれた同じ著者の諸著作や残された手紙やノートなども、引用や言及をしても、それは、あくまでも補助的な資料としてである。

私は、当面、テキストそのものが語りかけてくることに耳を傾けたい。したがって、ロラン・バルトがそ

れまでの文学批評を批判したように、「テキスト」を「『作者＝神』の《メッセージ》」（バルト 1979: 85）であるかのように扱うものではない。だからといって、バルトが主張したように、作品を作者から完全に切り離して読もうとするものでもない。私には、「『作者』の死によってあがなわれなければならない」「読者」（バルト 1979: 89）たらんとするような、（私にとっては）大それた考えはない。

多くの研究者が留意を促すように、この物語は、著者が推敲に推敲を重ねて完成したものである。稲垣直樹によれば、「すべての言葉、すべての文章が作者の統御のもとに選ばぬかれて、一言一句の無駄も過剰もなく配置され繋がり、一個の完璧な有機体を形成している」（稲垣 2013: 49）。

私には、そこまで言い切れる見識はない。しかし、私にも、作者が全身全霊を込めた作品だとの察しはつく。だからこそ、まずは、テキスト中心の読解に努めたい。伝記的、文化・文学史的、時代的等のコンテキストから論じることは、そもそも私の力の及ばぬところではあるが、たとえ、いかに該博な知識であろうと、かえってテキストそのものに向きあうことを妨げることもあるのではないかと危惧するからである。

前稿（芦田 2021）では、こうした視点から、王子さまの自分の星での単調で憂鬱なひとり暮らし、その生活を一変させる「花」との出会いと行き違い、「星」からの「脱出」と6つの星めぐり、そしてたどり着いた地球で、一本だけと思っていた「花」とそっくりな5千ものバラを見て大きな衝撃を受けるまでを読んできた。本稿で取り上げるのは、バラ園での衝撃の後、一匹のキツネとの出会いの場面である。

## 2. 「人間」を探して

この物語の語り手である「ぼく」は、世の中には、「生きるということがわかっている人たち *ceux qui comprennent la vie*」と、そうでない人たちがいると考えているようである（4章）。「おとな」になろうとしている王子さまにとって、幼いころには自明だったであろう「生きるということ」も、いまではよくわからないものになっている。王子さまが自分の星の手入れ（庭師修業）にいそしみながらも、とても悲しくなるのはそのためである。そうしたとき夕陽を眺めるのは、その優しさに包まれて、自ずから満ち足りていた幼き日の追憶に身をゆだねるためと思われる。

そうした鬱々とした日々のなかで、懇切なケアによ

って「友だち」になりかけた「花」ともうまくゆかず、すっかり孤独な旅に出た王子さまである。しかし、そこには、あえて独歩の旅に踏み出して、あらためて仕事（なすべきこと）を「探し *chercher*」たり、さまざまなことを「学ぶ *s'instruire*」という、少年らしい硬質の志があったはずである。

ところが、地球にやってきて5千ものバラが咲き誇る庭園を目の当たりにし、たった一本のバラしかない自分の星との格差に衝撃を受けた王子さまは、その初志を忘れ、草むらに突っ伏して泣き出してしまう。一匹のキツネが「こんにちは *Bonjour*」と声をかけてきたのはそのときである。ここまでは、前稿で読んだ。

王子さまの旅の出会いで先方から声をかけられるのは、小惑星の住人の独り言をのぞけば、ここだけである。王子さまは、地球にやってきてから、最初に出会ったヘビに対しても、次に見かけた砂漠の花に対しても、自分のほうから「こんばんは *Bonne nuit*」「こんにちは」と声をかけている。ヘビに向かっては、夜間でよく見えないまま「念のため *à tout hasard*」に声をかけている（17章、18章）。高い山の上からも、誰かがどこかにいるかも知れないので、これも「念のため」「こんにちは」と声をかけている（19章）。そして、庭園にやってきたときも、まずは王子さまが「こんにちは」と声をかけるのである（20章）。

このように、他の出会いの機会では、すべて王子さまのほうから声をかけている。王子さまは「探求」と「学び」の旅を続けているのだから、進んで教えるを請うためには当然の心がけだともいえる。

それにもかかわらず、キツネとの出会いだけは、キツネのほうから声をかけてきている。しかも、キツネ自身が後になって述べるように、見知らぬものにはまずは警戒して、身を潜めるのが野生としての自然の振る舞いである。そのキツネが見ず知らずの王子さまにわざわざ声をかけてきたのであれば、それなりの理由があるはずである。それは何か？

旅の始めには、「仕事（なすべきこと）を探す」ために6つの星を訪ねた王子さまであるが、それぞれの星の住人たちは、地位や職業こそ異なれ、「生きるということがわかっている」とは思えない、ヘンな (*bizarre, étrange, extraordinaire*)「おとなのひとたち」ばかりである。そうした経験を経て、王子さまの関心は、「仕事」そのものよりも、それに向きあう「人間 *homme*」のありかたへと変化したように思われる。

それゆえ、王子さまは、地球にやってきたものの、当初は「人っ子ひとりいないことに驚いている *bien*

surpris de ne voir personne」。そこで出会ったへびから「ここは砂漠であり、砂漠に人はいない Il n'y a personne dans les déserts」と教えられると、それなら「人間たちはどこにいるの Où sont les hommes?」と尋ねている。その次に出会った花には、「こんにちは」と声をかけた後すぐに、同じく「人間たちはどこにいるの?」と尋ねている。さらにその後、高い山からの呼びかけにこだまが返ってくると、それがどこかにいるはずの「人間たち」の声だと思いこんでいる。

そして、ようやく見つけた一本の道に見出した光明も、「おおよそ道というものはすべて、人間たちのところにつづいている les routes vont toutes chez les hommes」という期待である。その期待どおりに村里(近く)の庭園にたどり着いたとき、ここでも王子さまは「こんにちは」と声をかける。これは、もはや「念のため」というよりも、当然「人間たち」が園内にいるものと予想して、案内を請う挨拶だったと思われる。王子さまは、「人間(たち)」を探している。

ところが、「こんにちは」との返答は、思いがけない声々だったようである。その庭園は、挿絵に描かれているように高い塀に囲われていて、すぐには内側が見えなかったのである。王子さまは、語り手「ぼく」に出会うまでは、「目には見えないものを見る」という、恐るべき能力を発揮することはない。もし庭園にやってきて直ちに塀の中を見透したのであれば、その段階で「呆然と stupéfait」してしまい、「こんにちは」などとのんきな挨拶はできなかったはずである。

王子さまが返事の主たちにあらためて「目を向ける regarder」と、それが王子さまの「花」にそっくりの、しかも 5 千もの数の花たちだとわかる。王子さまは、ここで「呆然と」してしまうが、「あなたたちは誰なの Qui êtes-vous?」とだけはなんとか尋ねる。しかし、それ以上に、それまでのように「ここに人間たちはいますか?」とか、「人間たちはどこですか?」とは聞かない。それは、それらの花たちが「自分たちはバラだ Nous sommes des roses」と名乗っても、「ああ Ah!」と返すのがやっとで、それに継ぐべき言葉を失っているからに他ならない。

王子さまは、6 つの星めぐりで、「ヘンなおとなのひとたち」に困惑させられたとはいえ、まだ本当の意味での「まともな人間 homme sérieux」に出会う望みを捨てたわけではない。だからこそ、はるばる地球まで旅を続けてきたのである。それが、ようやく人里にたどり着いたというのに、まさにそのとき、「人間たち」のことは念頭から抜け落ち、近くにいるはず村び

とも思いは及ばず、たまたま現れたキツネに、「おいで、遊ぼう Viens jouer avec moi」と飛びつくのである。失意のどん底で初めて他者からかけられた声に、すがりつきたい思いがしたのであろう。しかし、それは、はたして偶然の出会いだったのか?

### 3. 狐疑と愚直と

王子さまは、キツネに、いまさら「人間たちはどこ?」と聞くこともなく、かわって、「遊ぼう」と、旅のなかで初めての提案をする。ところが、そもそもキツネのほうから声をかけてきたというのに、「きみとは遊べない Je ne puis pas jouer avec toi」という、つれない返事が返ってくる。どうも、「飼いならされていない Je ne suis pas apprivoisé」というのがその理由のようである。

そこで王子さまは、キツネの言ったことがよく理解できず、「〈飼いならす〉ってどういう意味なの Qu'est-ce que signifie «apprivoiser»?」と尋ねる。するとキツネは、「きみはこのあたりの人じゃないね Tu n'es pas d'ici, 何を探してるの que cherches-tu?」と、聞き返してくるのである。

ここのくだりについては、王子さまが子どもだから、あるいは地球の外からやってきたから、「飼いならす apprivoiser」という(地球の、おとなの)言葉を知らなかったため、単純にその意味(語義)を尋ねたとする解釈や解説が多い。「きみはこのあたりの人じゃないね」というキツネの言葉にも、「地球の人じゃないから、この言葉を知らないんだね」という含意があるようにもとれる。

しかし、このキツネの返事のうち、「きみはこのあたりの人じゃないね」の部分は前置きであって、「きみは何を探しているの?」という疑問が主文である。「〈飼いならす〉ってどういう意味なの?」との質問と、「何を探しているの?」という問い返しのあいだには対応関係がない。問題のひとつは、そこである。

フランス文学の小島俊明は、「[よその] 星から来た王子さまには『飼いならす』という言葉の意味がよくわからない」(小島 2002: 158)と解釈するひとりである。他方、同じくフランス文学の山崎庸一郎は、「子どもである王子さまにはよく理解できない」(山崎 1994: 107)と解するひとりである。

しかし、王子さまは、「異星人」とはいえ、この物語では、地球の言葉がわかることが前提になっている。しかも、小島によれば、「飼いならす apprivoiser」

という言葉（フランス語）は『「主従関係」をあらわす日常的で卑近な言葉』（同上：160）なのだという。そうであれば、その言葉自体は、そこそこの少年なら知ってはいるはずである。おそらく、「〈飼いなす〉ってどういう意味なの？」という王子さまの質問は、その単語を、まるで知らなかったためではない。

また、山崎によれば、『「飼いなす」(apprivoiser) という動詞はもともと動物にかんするもので、『野性的でなくする』、『馴化する』という意味であるが、人間にたいしては、『手なずける』、『誘惑する』、『支配する』といった、あまりかんばしくない意味である』（山崎 1994：107）。

しかし、この物語で王子さまと関わる動植物は、自然界の特性は保持しているものの、すべて擬人化されていて、「人間」と同列である。そうすると、王子さまは、この「日常的で卑近な言葉」を知らなかったというよりも、むしろ、キツネがこの場面で「主従関係をあらわす」「あまりかんばしくない意味」の言葉を使ったことに違和感を覚えたということではないか。

すなわち、「いっしょに遊ぶ jouer avec」のに、なぜ、「飼いなす／飼いなされる」という上下・主従関係を前提にする必要があるのかという疑問である。王子さまは、それがとっさには理解できなかったものと思われる。王子さまは、「とてもかわいいね Tu es bien joli…」と、あらかじめ、自分の好意を伝えているのだからなおさらである。だから、自分なりに「考えてから après réflexion」尋ねている。同時に、王子さまは、キツネがその言葉に、通常とは異なる、重要な意味を込めているらしいということには、直感的に気づいている。それゆえ、王子さまは、この同じ質問をさらに2度繰り返すことになる。

ところが、キツネは、王子さまの質問には答えず、「きみはこのあたりの人じゃないね」と前置きして、「何を探しているの」と聞き返してくるのである。なぜ、キツネは、王子さまの質問をはぐらかすのか。何か思惑があるはずである。これまで、両者の問答のすれ違いに十分留意した「読み」は、ほとんどないように思われる。

そもそも、キツネの「きみはこのあたりの人じゃないね」という推察は、何を意味するのか。王子さまが「飼いなす apprivoiser」という平凡なフランス語（地球の言葉）を知らないことから、地球の人間でないのでは、と疑ったという解釈も成り立つ。しかし、キツネは、もっと後になってそのことを知らされるのである。したがって、「このあたり ici」は、「この星

（地球）ではなく、文字どおり「このあたり」（キツネの生活圏）のことと思われる。その場合、王子さまの質問とキツネの返答とは、かみ合っていない。

また、「何を探してるの？」と問い返すのも奇妙である。初めての人や見慣れないものに会ったときの質問としては、バラ園にやってきたときの王子さまのように、「きみ（たち）は誰 Qui êtes-vous?」か、酒飲みや転轍手に会った際の王子さまのように、「ここで何してるの Que fais-tu la (ici)?」か、砂漠で王子さまの前に現れたへびのように「ここには何しにきた Que viens-tu faire ici?」などが普通であろう。「ヒツジの絵を描いて」という王子さまの声で眠りを覚まされた、語り手「ばく」が最初に発した言葉も、「いったい……ここで何してるの Mais... qu'est-ce que tu fais là?」である。王子さまも、キツネに「きみは誰 Qui es-tu?」と尋ねている。

ましてや、それまで王子さまは、草むらにひとり泣き伏していたのである。そこにかける言葉として、「どうしたの?」や「なぜ泣いているの?」ならわかるが、「何を探しているの?」とは、不自然である。

「何を探してるの?」は、王子さまが「探しもの」をしていることを知ってか推測したうえでの、かなり限定的な問いである。しかし、このとき、王子さまは自分の「探しもの」のことをすっかり失念してしまっているものであり、キツネは、王子さまが「探しもの」の旅の途中だということはまだ知らないはずである。

そうすると、「何を探してるの?」というキツネの問いは、「きみはこのあたりの人じゃないね」という前置きと併せ考えると、自分の「縄張り」に紛れ込んできた「よそ者」への詰問のように思える。「おまえはこのあたりじゃあ見かけないけど、怪しい奴だな。おまえが狙っている獲物はなんだ?」と。

挿絵とも併せ考えると、一本のリンゴの木のそばの地中に潜んでいたこのキツネは、王子さまの泣き声を聞きつけ、何ごとかと、巣穴から（あるいはリンゴの木の陰から）油断なくあたりの様子をうかがいながら言葉をかけてきたものと思われる。だから当初、「声はすれ la voix dit」ども「姿は見えず ne rien voir」だったのである。

これも後でわかることだが、キツネは自分たちを狩り立てる「人間たち」（狩人 les chasseurs）を恐れている。泣き声の主が子どもだとしても、キツネ狩りのおとなたちについてきて、はぐれたのかも知れない。銃をかついだ男の絵は、王子さまの背後に浮かんだキツネの懸念の形象であろう。それなら、「いっしょに

遊ぶ」どころか、すぐに逃げなければならない。

このように、「きみはこのあたりの人じゃないね。何を探しているの?」というキツネの問いは、「〈飼いならす〉ってどういう意味?」という王子さまの質問への回答でないのはもちろん、王子さまが地球の外からやってきたと推測しての反応でもない。王子さまの質問を無視して、自分の関心(懸念)だけに即しての発話なのである。

「狐疑」というべきか、キツネは用心深い。「飼いならされていないから、きみとは遊べない」(あかの他人のくせに、なれなれしく近づくな)という拒絶も、「このあたりの人じゃないね」(見なれないけど、怪しいヤツだな)という疑念も、「何を探しているの?」(お前が狙っている獲物はなんだ?)という探りも、野性のキツネの警戒心に発する言葉であろう。

キツネが王子さまの質問を無視するのは裏腹に、王子さまは、キツネの質問の一つひとつ律義に答えていく。語り手「ぼく」は、王子さまが「質問に答えてくれなかった」となんども繰り返している。しかし実は、王子さまが質問に答えない(ことがある)のは、「ぼく」に対してだけである。他のものたちには、問われたことにはおおむねきちんと答えている。

これも、「王子さま」は「探求」と「学び」の旅に出たのだから、教えを請うという立場をわきまえた礼儀というものであろう。王子さまは、砂漠の花に「人間たち」の居場所を尋ねた際と、キツネからの声かけに応えた際に、「丁寧 *poliment*」だったと明記されている。この二つの場面が例外ということではなく、これこそ、王子さまの基本的な学びの作法である。

王子さまは、多くの人が思いこんでいる(思いこみがっている?)ほど純真無垢ではないが、一部の精神分析家や心理学者が強調するほど自己中心的なわけでもない。内面にさまざまな矛盾と葛藤を抱えながらも、王子さまの学びの姿勢は健気であり、謙虚である。ただ、その若者らしいひた向きさゆえの焦りからか、旅の目的を見失いかけたり、他者への配慮がおろそかになったりする、危うさも抱えている。

「〈飼いならす〉ってどういう意味?」との質問をキツネが無視して、逆に「何を探してる?」と問い返してきても、王子さまは、戸惑う様子も気を悪くする風もなく、「人間たちを探している *Je cherche les hommes*」と素直に答えている。そのうえで、「〈飼いならす〉ってどういう意味?」という同じ質問を、もう一度キツネに向ける。

ところがキツネは、こんども王子さまの質問に答え

ない。そのうえ、「人間たちを探している」という王子さまの目的を聞き出しながら、その理由には興味を示さず、当然知っているはずの村びとの居場所を教えてやるわけでもない。かわって、「人間たち」という話題をこれまた自分の関心に引き寄せて、やつらは鉄砲もって狩りをするので厄介だが、(キツネの餌になる)ニワトリを飼っているのが「唯一の取り柄 *leur seul intérêt*」だと、アンビバレントな人間観を披露した後、「ニワトリを探しているのか *Tu cherches des poules?*」と、ふたたび問いでもって返すのである。

さしずめ、「よそ者のおまえ(たち)の狙いは、俺たちキツネでないなら、ここの村びとが飼っているニワトリなのか?」と、さらに探りを入れている気配がある。もし王子さま(たち)の目的が「他人のニワトリ」なら、キツネへの直接的な攻撃者である心配はゆるむが、獲物を横取りする「縄張り荒らし」の懸念が残る。キツネ自身が村びとたちの目をかすめてニワトリをくすねる狡猾な「狩人」なのだから、そうした不審を抱いたとしても不自然でない。

それに対し、王子さまは、ニワトリではなく「友だちを探している *Je cherche des amis*」と、こんどもまた素直に答えた後、「〈飼いならす〉ってどういう意味?」と、3 度目になる同じ質問を投げかける。それまでキツネは、王子さまの質問には取りあわず、自分の関心(懸念)についての話ばかりを続けているが、王子さまも、キツネのはぐらかしやじらしに惑わされることなく、同じ質問を愚直に繰り返すのである。

こうしてキツネは、王子さまが害敵でも邪魔者でもないこと、また、王子さまは「人間たち」を探しているものであり、それも、功利的理由からではなく、「友だち」を求めてのことであることを慎重に確認して、やっと、「〈飼いならす〉ってどういう意味?」という、王子さまの3 度目になる同じ質問に答えるのである。「あまりに忘れられていることだ *C'est une chose trop oubliée*」と前置きしてキツネが言うには、「それは、〈絆(きずな／ほだし)を創る〉という意味である *Ça signifie «créer des liens...»*」。

#### 4. イニシエーションという試練

王子さまの質問にキツネが最終的に回答するまでの、文章としては短いものの、やや入り組んだ過程を振り返ってみると、それは、キツネが王子さまへの疑念と懸念を払拭するための遠回りだったことがうかがえる。しかし、そうした迂路をたどることで、王子さ

まにも、見失いかけていた旅の目的を再認識させるという結果をもたらしたようにも見える。

庭園に咲く無数のバラの花に大きな衝撃を受けた王子さまは、「仕事（なすべきこと）を探す」ことも、「いろいろ学ぶ」ことも、「人間たちを探す」ことも、およそ旅の目的をすべて失念してしまっている。自分の星にひとり残してきた「花」への愛惜の念や、「夕陽の優しさ」という唯一の慰めさえ忘れている（芦田 2021：105-106）。そして、そのショックをまぎらすために、たまたま目の前に現れたキツネに「遊ぼう」とすぐるのである。

王子さまは、地球の旅の終わりに、「人間たち」は、「探しているものを見つけることができない ils n'y trouvent pas ce qu'ils cherchent」し、「もはや何を探しているのかさえわからなくなっている ils ne savent plus ce qu'ils cherchent」という印象を、語り手「ぼく」に告げる（25 章）。しかし、そうした地球の「人間たち」の空虚は、とりもなおさず、キツネが現れたときの王子さま自身の心中にはかならない。

ところがキツネは、王子さまの安直な申し出に待ったをかけ、「自分は飼いなされていない」と突き放す。そして、その言葉づかいをいぶかる王子さまに向かって、逆に次々と問いを投げ返す。王子さまも、それらの問いかけに真正面から向き合うことで、自分が「人間たち」を、とりわけ「友だち」を求めて、旅を続けてきたことを思い起こすことになるのである。

ただ、一部に誤解があるようなので付言しておく、少なくとも「ぼく」が語るかぎりでは、王子さまは、旅のなかで「子どもたち」を「探す chercher」ことはない。彼らのことを話題にすることはあるが、直接「出会う tourver」こともない。王子さまが探し求める「人間」や「友だち」のなかに、「子ども」は含まれていないと思われる。

このように、キツネとの対話をとおして王子さまは旅の目的を再確認するのであるが、キツネの猜疑心が結果的に思いがけない効果をもたらしたというより、これこそがキツネの本当の狙いであったようにも思える。おそらく、キツネが王子さまに対して慎重だったのは、人間（狩人）への野生の動物の警戒心に起因するだけではない。

キツネが「飼いならず」ことの真意を尋ねる王子さまの質問を2度にわたってはぐらかすのは、むしろ、王子さまの「探求」と「学び」の志の固さを見定めようとしたからではないか。後にキツネは、王子さまに向かって、「飼いならず」ためには「とても忍耐強く

あること être très patient」と、「時間を費やすこと perdre du temps」が大切だとさす。キツネは、そのことを、野生の動物らしい用心深さを装いながら、あらかじめ身をもって示しているようなのである。

これも後にキツネが語るところでは、「自分を飼いなしてくれたもの以外の足音がすると地中に逃げ込む Les autres pas me font rentrer sous terre」の だ という。飛行家でもあった作者のサン＝テグジュペリは、自分自身が砂漠に不時着し、喉の渇きを癒すために生き血を飲もうと砂漠に棲むキツネ（フェネック）を探したことがある。その際、「フェネックはそこ〔巣穴〕にかくれていて、わたしの足音の響きにおびえながら、きき耳を立てているにちがいない Le fénec est là qui m'écoute sans doute, épouvanté par le grondement de mon pas」と推測している（『人間の大地』：139）。

ところが、この物語のキツネは、まず、見ず知らずの王子さまに、「飼いなされていない」にもかかわらず自ら近づいてきて、「こんにちは」と声をかけている。そのあげく、「いっしょに遊ぼう」という王子さまの申し出を、「飼いなされていない」からと一蹴するのである。これでは、「接近」と「拒絶」の双方でつじつまが合わない。

キツネは、たまたま泣き声を耳にして、恐る恐る声をかけてきたというより、何か期するところがあって、王子さまを待ち構えていたのではないか。後になって、キツネは、「飼いなしたものしか知ったことにならない On ne connaît que les choses que l'on apprivoise」と、王子さまをさとす。しかし、このキツネは、おそらくすでに、王子さまがなに者であるかを知っている。何を探し求めて「ここ」にたどりつき、何に落胆して泣いていたのかも知っている。そこにひと声かければ、「いっしょに遊ぼう」と、やすやす乗ってくることも知っている。何もかも知ったうえで、迷える王子さまを導く者として現れている。

王子さまには、そのキツネが「とても可愛い」映ったようだが、その実、王子さまが見失いかけていた「探しもの」を思い出させるキツネの手腕には、老賢者の趣がある。キツネが王子さまの「メンター」（人生の師）だとの指摘は、珍しいものではない。ただ、その多くは、キツネが王子さまに「生きるということ」の「真理」や「秘密」を伝授することで、そのように捉えているようである。

しかし、私には、このキツネのメンターたるゆえんは、一方的に教説を垂れるのではなく、王子さまとの必ずしもかみ合わない対話を根気よく重ねることで、

王子さま自身に「本質的なこと」を気づかせてゆく手法にあるように思える。問答法を駆使する、古代ギリシアの哲人を彷彿とさせるところがある。

したがって、キツネは、相手に何も求めず無条件に一方的に導く者ではない。王子さまも、キツネが提出する課題を受け止め、自分自身を見つめなおし、そして回答(解答)しなければならない。

もし、王子さまがキツネのはぐらかしやじらしにはまって、「飼いなす」ということの意味の「探求」を放棄し、最終的に「友だちを探している」という解答を提出しなければ、弟子入り(イニシエーション)の最初の関門さえパスすることができず、いわば「無縁の衆生」のままである。この段階で、キツネは、メンターの役を降り、もとの野生の(飼いなされていらない)動物に戻って逃げ去ったに違いない。そして、王子さまは、「飼いなす」ということの謎を明かされることなく、ひとりぼつんと草むらに残されていたことであろう。

キツネは、辛抱よく、王子さまに忘れかけた「探しもの」(人間たち・友だち)を思い出させようとする。王子さまも、キツネから我慢よく「飼いなす」ということの秘密を聞きだそうとする。王子さま

に回心をもたらすことになる両者の掛け合いには、いっけん不協和音をともないながら、その実、師と弟子との呼吸の一致がある。この後、王子さまは、キツネが授ける大切な教えを「忘れないために *afin de se souvenir*」一つひとつ復唱するが、それも、王子さま自身に(苦い悔恨の回想も含め)思い当たる(*se souvenir*)ところがあるからこそだと思われる。

王子さまは、こうして最初の試練を乗り越え、「絆を創る」という教えを得るが、この「言い換え」でもって、キツネがいうところの「飼いなす」という言葉の謎が解かれたとみる向きも少なくない。とりわけ昨今の日本では、「絆」や「絆を結ぶ」という言葉は、ほとんど無規定的に巷にあふれているため、空疎な説得力をもってしまいがちである。

しかし、王子さまは、それで納得したのではない。「絆を創る(結ぶ)だって *Créer des liens?*」と、さらに問い返しているのである。キツネが念を押すように、それが「あまりに忘れられていること」だとすれば、理解するにしても、実践するにしても、そう簡単にはいかない。キツネを導師にしての、王子さまの「生きるということがわかる」ための「修行」は、まだ始まったばかりである。

## 文 献

【*Le Petit Prince* およびその他のサン＝テグジュペリの著作のフランス語テキスト】

Saint-Exupéry, Antoine de: *Œuvres complètes*, 1-2, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1994-1999

【参照した *Le Petit Prince* の邦訳書】

池澤夏樹訳 2005 『星の王子さま』 集英社文庫

石井洋二郎 2005 『星の王子さま』 ちくま文庫

稲垣直樹訳 2006 『星の王子さま』 平凡社

倉橋由美子訳 2005 『新訳 星の王子さま』 宝島社

河野万里子訳 2006 『星の王子さま』 新潮文庫

小島俊明訳 2006 『星の王子さま』 中公文庫

管啓次郎訳 2011 『星の王子さま』 角川文庫

内藤濯訳 1953 『星の王子さま』 岩波少年文庫

野崎歓訳 2006 『小さな王子』 光文社文庫

藤田尊潮訳 2005 『小さな王子 新訳『星の王子さま』』 八坂書房

三田誠広訳 2008 『星の王子さま』 講談社青い鳥文庫

三野博司訳 2005 『星の王子さま』 論創社

山崎庸一郎訳 2005 『小さな王子さま』 みすず書房

【その他の参考文献】

サン＝テグジュペリ, アントワヌ・ド(山崎庸一郎訳) 2000 『人間の大地』(コレクション3) みすず書房

芦田徹郎 2021 『『星の王子さま』を読む(1)―「子ども」であることと「おとな」になること』, 甲南女子大学研究紀要Ⅰ(57)

稲垣直樹 2013 『『星の王子さま』に触れる難しさ―無限螺旋のワンダーランド』, 河出書房新社編 2013 『星の王子さまとサン＝テグジュペリ』 河出書房新社

大橋正宏 2010 『かわいい仲間・その翻訳覚え書』 プイツーソリューション

加藤典洋 2020 『テキストから遠く離れて』 講談社文芸文庫

小島俊明 2002 『おとなのための星の王子さま』 ちくま学芸文庫

バルト, ロラン(花輪光訳) 1979 『物語の構造分析』, みすず書房

藤田尊潮 2017 『サン＝テグジュペリーイメージ連鎖の中で』 八坂書房

Cerisier, Alban 2006, *Il était une fois... Le Petit Prince d'Antoine de Saint-Exupéry*, Gallimard (Folio)